様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６６１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５９３４１１

研究課題名（和文）在日フィリピン人の乳がん早期発見を目指したパートナーシップ・プログラムの評価

研究課題名（英文）Evaluation of the breast cancer early detection educational program for Filipino women in Japan based on partnership

研究代表者
鈴木　良美（SUZUKI, Yoshimi）

東邦大学・看護学部・准教授

研究者番号：９０５１６１４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：在日フィリピン人グループとの協働により、乳がん死亡数が急増している在日フィリピン人を対象とした乳がん早期発見教育プログラムを過去3年間で全国9カ所（2010年からの累積で全国15カ所）において実施し、149名の参加者を得た。同プログラムは、在日フィリピン人の乳がん検診に関するアクセスへの障壁を改善するのに有効であり、さらに、地元の自治体の国際課などと連携して開催できた場合、地域のヘルスケアサービス向上に効果があることがわかった。

研究成果の概要（英文）：The breast cancer mortality among Filipino women in Japan has increased. Therefore, collaborating with the Filipino groups in Japan, we have developed the breast cancer early detection educational programs for Filipino women living in Japan, and conducted these programs in 9 communities during 2011-2013 fiscal years (in total 15 communities since the fiscal year of 2010). Total number of participants was 149. This program was effective at reducing their awareness of the access barrier to mammogram. Moreover, it was revealed that this program could improve community health care services if we can cooperate with the international section of local governments.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学　地域・老年看護学

キーワード：外国人　在日フィリピン人　パートナーシップ　乳がん　中年期

## １．研究開始当初の背景

日本に定住化したニューカマー在日外国人女性が中年期を迎えつつある。特に、在日フィリピン人女性は、40 歳以降の割合が、2002 年の 10.8%から、10 年後の 2012 年には 45.9%と急速に高まっている。それに伴い、在日フィリピン人女性の乳がんによる死亡数も、1997－99 年には 2 人のみであったが、03－05 年には 12 人、06－08 年には 30 人と急増している。このように、在日外国人の中年期の健康に関するニーズは高まりつつある一方で、中年期の在日外国人に焦点を当てた文献は少なく、健康指標に関するデータも乏しいのが現状である。

また、米国の公衆衛生分野で注目されている CBPR (Community-based participatory research)は、研究者と地域の人々とのパートナーシップによって行われる参加型研究である。この方法を用いることにより、対象の文化にみあう方法で、健康向上を目指した研究を行うことができると考える。特に、CBPR を展開する上では、コミュニティの人たちとのパートナーシップをどのように評価するかが研究方法における課題の一つとなっており、これらの課題にも本研究を通じて取り組んでいきたい。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、在日外国人女性の健康向上を目指し、中年期の在日フィリピン人女性の乳がん早期発見教育プログラムを一例とし、在日フィリピン人女性とのパートナーシッププログラムを実施・評価し、地域看護学分野における実践と研究への示唆を得ることである。目標は以下のとおりである。

(1)在日フィリピン人乳がん早期発見教育プログラムを在日フィリピン人 NGO とのパートナーシップにより実施する。
(2)プログラム参加者の乳がん・検診への知識・認識を明らかにする。
(3)プログラムを通じたパートナーシップの評価を行う。
(4)在日外国人の文化にみあうプログラムについて実践を通じて検討する。

## ３．研究の方法

(1)プログラムの実施方法

本研究は、CBPR の手順に基づき、在日フィリピン人 NGO とのパートナーシップにより、運営委員会を設立し、運営方法などについて話しあいながら進めた。

プログラムの実施手順は、以下のとおりである。

①在日フィリピン人 NGO のオーガナイザーである在日フィリピン人女性から全国のフィリピン人コミュニティへ開催を呼びかけた。
②開催地の協力者を通じてチラシを配付するなどして対象を募集した。プログラムの対象者は乳がんの好発年齢とされる 35~50 歳程度の在日フィリピン人女性である。
③プログラムの実施時は、自らも乳がん罹患経験のあり、あらかじめ研究者から乳がんに関する研修を受けた上記オーガナイザーが講師を務めた。講師はタガログ語で乳がんや検診に関して講義し、さらに自分の体験談を話したり、グループ討議の運営を行った。またプログラムの前後に、乳がんの知識や認識に関する無記名自記式タガログ語質問紙によるアンケートを実施した。
④さらに、より対象者に適したプログラムとなるよう実施結果に基づき、プログラムの内容に関して評価・修正を加えた。

これらのプログラムを計画する際には、文献検討とともに乳がんの専門医や看護研究者にもアドバイスを受けるとともに、東邦大学看護学部倫理審査委員会の承認を受けた。

(2)プログラムの評価方法

以下の４つの視点から評価を行った。

①質問紙による参加者の乳がん・検診への知識・認識に関する調査

プログラム実施前後に、乳がんの知識や認識に関する無記名自記式質問紙調査を行った。質問紙の作成は、フィリピン系米国人等を対象に Wu(2007) らが開発した質問紙や、文献検討、対象者からの聞き取り調査をもとに行った。質問紙には、乳がん・検診の知識、乳がん発病のリスクの認識、マンモグラフィ受診へのセルフエフィカシー・利益の認識・受診への障壁の認識を含んでいる。

②運営委員会におけるチェックリストを用いたパートナーシップの実施・評価

パートナーシップを評価するため、文献検討や概念分析を踏まえて研究代表者が開発した、準備・実施・結果に関する 17 項目からなる「地域保健パートナーシップチェックリスト」を用いた。運営委員会でパートナーシップの評価を本研究の１年目、３年目に行った。

③文化を考慮した募集方法の検討

フィリピン人の文化にみあうプログラムを展開する中で、課題として浮かび上がってきたのは、人集めの難しさであった。フィリピン人の場合、参加の申し込みをしていたとしても、その日の天候や気分などで欠席する人も多く、参加者の予測が困難な場合が多かった。そこで、プログラム開催の実績から、各開催地の参加者数と、各開催地における開催日時、参加への声かけの方法、コミュニティの特徴、開催自治体の在日フィリピン人人口や参加者の属性との関連を明らかにし、文化を考慮した募集方法の工夫について検討した。

④現地協力者への聞き取り調査
　在日フィリピン人コミュニティや個人へ、プログラムがどのように効果をもたらしたのかを確認するため、プログラム終了後に、現地協力者へ聞き取り調査を行った。

(3)評価プログラムの検討
乳がん早期発見教育プログラムの事後評価で用いる健康増進プログラムとして、在日フィリピン人の更年期に関するプログラムの可能性を文献検討やインタビューによって検討した。

４．研究成果
(1)プログラムの実施結果
　在日フィリピン人乳がん早期発見教育プログラムは 3 年間で全国 9 カ所（2010 年からの累積で 14 カ所）で実施し、計 149 名の参加者を得た。参加者は１カ所につき、4～16 名であった。そのうち、質問紙への回答が得られ、乳房疾患のない 130 名の平均年齢は 40.8 歳（SD=8.6）、平均在日年数 13.7 年（SD=8.7）であった。
　プログラム開催時、参加者は講義中も積極的に発言し、活気に満ちたプログラムとなった。

(2)プログラムの評価
①質問紙による参加者の乳がん・検診への知識・認識に関する調査
　プログラム参加者へ乳がんの知識や認識に関する質問紙調査で回答が得られ、乳房疾患のない 130 名のデータを量的に分析した。その結果、乳がん・検診の知識や認識は、年代による差はなく、乳がん検診の経験の有無が影響していると考えられた。鈴木ら(2013)が日本人女性を対象にした調査では、40 代以降の方が、20 代、30 代よりも乳がんや検診の認識率が高く、年代による差がみられていた。日本では、40 歳以降の女性に自治体から日本語による乳がん検診の案内が郵送されたり、乳がんに関する普及啓発活動が推進される中で、40 代以降の人たちに、その効果が表れているのではないかと考えられる。他方で、それらの日本人向けの普及啓発活動は、在日フィリピン人に対しては、言葉の壁などの影響もあり、あまり周知されていない可能性もある。今後は、後述する自治体の国際課などとタイアップして、外国人向けのがん検診啓発などを行い、外国人へのがん予防・早期発見への対策を講じていく必要がある。
　また、プログラム前後における質問紙への回答を比較してみると、同プログラムは、乳がん検診のアクセスへの障壁を改善するのに有効であると考えられた。
　質問紙のデータ分析の中間報告を、The 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing にて行った。

②パートナーシップの評価
　「地域保健パートナーシップチェックリスト」を用いて、運営委員会でパートナーシップ形成の進捗状況を評価したことにより、これまで感覚的にとらえていたパートナーシップの成果を意識的に評価し、課題を見出すことが可能となった。さらに、プログラムの成果を運営委員で共有できる機会ともなり、関係強化に役立てることができた。
　この成果は、第 16 回聖路加看護学会学術集会で報告した。

③文化を考慮した募集方法の検討
　参加者数への関連要因を、開催実績に基づき明らかにした。その結果、参加者増加の要因として、開催時期は、就労者や日曜午前の教会ミサ出席者へ考慮した上で日曜午後とし、できるだけ春・夏の暖かい時期に設定すること、声かけの方法は、コミュニティの人たちから信頼を受けている教会関係やマネジメント能力に長けているフィリピン人 NGO のリーダーがメンバーへ直接声かけすることが上げられた。他方で自治体の在日フィリピン人人口や、対象者の属性と参加者数とは関連がないことから、フィリピン人コミュニティとしての結束力やニーズ、リーダーシップや信頼等が参加に大きく影響するのではないかと考えられた。
　この結果は、フィリピン研究会全国フォーラムで報告した。

④現地協力者への聞き取り調査
　プログラムを開催した現地協力者へ聞き取り調査を行った結果、プログラムの波及効果として、地元の自治体の国際課などと連携して開催できた場合、終了後も継続的な効果が見られたことがわかった。例えば、ある自治体では、プログラム実施後に、国際課の職員の働きかけで、英語版の乳がん・子宮がん検診の案内を在日外国人へ配布していた。また、保健師を講師に招いて外国人女性を対象とした乳がんや子宮がんの講演会を実施した自治体もあった。

(3)評価プログラムの検討
　乳がんプログラム評価の際に、別の健康課題をテーマにしたプログラムの開催を検討するため、在日フィリピン人の更年期に関する文献を検討したが見当たらなかった。
　そこで、在日フィリピン人女性の更年期に関する情報源や認識などについてインタビューを行った。研究協力の得られた 9 名のうち、日本に 1 年以上生活している 6 名のインタビュー結果を質的に分析した。その結果、対象者は更年期をナチュラルなこととととらえていた。これは母国や米国在住のフィリピン人への研究でも同様の傾向が見られた。対象者の情報源はフィリピン人の家族や友人に限定されていた。他方で、研究協力を得ら

れる対象が少ないという現状もわかり、更年期のプログラムを乳がんプログラムの評価に用いるには限界があることが示唆された。
この成果の一部は、第 33 回日本看護科学学会学術集会で報告した。

(4)結論
本研究では、ニーズが高まりつつあるもののこれまで注目されていなかった、中年期の在日外国人女性に焦点を当て、CBPR に基づき、乳がんの早期発見教育プログラムを実施・評価した。この研究によって以下の内容が明らかになった。

・在日フィリピン人の乳がん・検診の知識や認識は、年代による差はなく、乳がん検診の経験の有無が影響していると考えられた。在日フィリピン人には、日本の乳がんの普及啓発活動は、言葉の壁などもあり、あまり周知されていない可能性があると考えられた。
・地元の自治体の国際課などと連携してプログラムを開催できた場合、終了後も継続的な効果が見られた。今後は、自治体の国際課などとタイアップして、外国人向けのがん検診啓発などを行うなど、外国人へのがん予防・早期発見への対策を講じていく必要がある。
・「地域保健パートナーシップチェックリスト」を用いて、運営委員会で検討したことにより、これまで感覚的にとらえていたパートナーシップの成果を意識的に評価し、課題を見出すことが可能となった。
・在日フィリピン人の文化にみあう方法で参加者を増やすための工夫として、春・夏の暖かい時期の日曜午後に開催し、コミュニティの人たちから信頼を受けている人から声かけをすることがあげられた。
・本研究の限界として、プログラム１年後のマンモグラフィ受診の評価が十分にできていないことがあげられる。

引用文献
鈴木久美、林直子、樺沢三奈子. (2013). 成人女性の乳がんおよび乳がん検診・自己検診に対する意識調査，保健の科学，55(1), 63-70.
Wu TY et al., (2007). Mammography stage of adoption and decision balance among Asian Indian and Filipino American women, Cancer Nurs, 30(5), 390-8.

## ５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　4　件）
①Y Suzuki, Y Tsuno, Y Arai, Changes in Breast Cancer and Screening Knowledge and Beliefs of Filipino Women in Japan, as a Result of the Breast Cancer Early Detection Program, The 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing, Kobe, 2011 年 7 月 17 日
②鈴木良美、在日フィリピン人乳がん早期発見プログラムにおけるパートナーシップの評価、第 16 回聖路加看護学会学術集会、東京都中央区、2011 年 9 月 24 日
③鈴木良美、在日フィリピン人乳癌早期発見教育プログラムの中間報告、フィリピン研究会全国フォーラム、兵庫、2013 年 6 月 27 日
④鈴木良美、在日フィリピン人女性の更年期に対するとらえ方やその情報源と対処、第 33 回日本看護科学学会学術集会、大阪、2013 年 12 月 7 日

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

## ６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　良美（SUZUKI, Yoshimi）
東邦大学・看護学部・准教授
研究者番号：90516147

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：